

第二次世界大戦前のロマン派受容

岡 田 章 子

日本は嘉永6年(1853)に200年余の鎖国を解き、海外との交流が始まり、明治維新を経て、欧米文化の影響を受けながら急速に近代化の道を歩んで行った。文学においても、新しい近代国家の発展と西洋文学の流入は一体と考えられて、次々と日本に紹介された。勤勉と学問の進展は特に強調されて、その代表が福沢諭吉の『学問のススメ』(明治6年[1873])である。彼は人間は生まれながらにして平等であり、貧富の差はなく、勤勉に励むものは富を得て豊かな人生を送ると述べた。国家の繁栄と個人の幸福は一致するものであるという考えが一般的に受け入れられた。こうした社会的な背景と新しいものを求める気運の中でロマン派詩人も日本に紹介された。本稿ではロマン派の主要な五詩人—Wordsworth, Coleridge, Byron, Shelley, Keats—を取り上げ、初めて日本の文献に登場してから戦前までの約70年間にいかに日本の詩人、小説家、研究者、一般の読者に受け入れられたかを概観したい。

最初にロマン派詩人の名が登場するのはスコットランドのジャーナリストである Samuel Smiles 著 *Self-Help* (1859) を中村直太郎が翻訳した『西国立志篇』(明治4年[1871])である。彼は当時の風潮に合わせ、殊更にロマン派詩人の立身出世の側面を強調して、Scott, Wordsworth, Coleridge, Byron, Shelley, Keats らを低い身分から高い地位に登った人々として紹介した。中でも Shelley は困苦の末に大詩人となったと讃え、Byron は不自由な足のハンディキャップを越えて有名になったと述べ、Keats は貧しい生まれながら天才詩人になったと記述している。この『西国立志篇』は当

時の精神風土と相まって、ロマン派詩人の名が日本の小説家や詩人に広く知られることに役立った。

いったん西洋文学の移入が始まると、まず小説家や詩人たちがその作品に惹かれ、すぐに模倣しはじめた。明治維新後のはじめの10年程は易しく近づきやすい作品から全くの手探りで翻訳され、言及され、日本の詩の一部として受け入れられた。この時代の傾向を代表するものが明治15年（1882）に出された『新体詩抄』である。ここでは14篇の訳詩と5篇の日本の詩が含まれ、翻訳した詩と本来の日本詩の区別なく双方一緒に近代の詩と考えられたことを示すものである。『新体詩抄』には Gray の “An Elegy Written in a Country Churchyard” は含まれているが、ロマン派の詩は全く含まれていない。しかしながら、島田謹二も指摘しているように、¹この詩抄は Wordsworth やその他の英米の詩人が広まる基礎を築いた。この他に初期のロマン派受容に貢献したものは明治18年（1885）から明治34年（1901）まで刊行された『女学雑誌』である。これは女性の教育を目的とするものであったが、英文学の紹介の役割も大きく、後に『文学界』に引き継がれ、ロマン主義の基礎ともなった。明治24年（1891）に日本最初の英文学史と言われる渋江保の『英国文学史』も出され、5詩人とも簡単な紹介がされている。大和田建樹の『欧米名歌詩集』3巻（明治27年 [1894]）にも104篇の詩が訳出され、この頃の西洋文学の愛好を示し、Keats 以外のロマン派詩人が含まれている。教育面では明治29年（1896）には東京大学に日本最初の英文学科が開設されて、英米文学の受け入れの基盤が整った。

こうした中でロマン派詩人の中では Wordsworth が最も早く親しまれたが、はじめは易しい詩を断片的に選んで訳していた。明治23年（1890）には徳富蘇峰が「ルーシー・グレイ」に言及し、明治24年（1891）には山田美妙が「マイケル」を「山の翁」と題して訳し、解説している。また明治25年（1892）には熱烈な Wordsworth 愛好家宮崎八百吉が “Immortality” を訳し、これらの訳詩は広い読者をもつようになった。Wordsworth の歌う自然との心の交流や人間形成の思想は当時の国木田独歩や浦瀬白雨、島崎藤村

らに歓迎された。本来日本の伝統の中で親しまれた自然美への愛好に Wordsworth の物の見方は西欧的な新鮮さと親しみの両方を兼ね備えて、明治の詩人たちを啓蒙した。

ちょうどこのころ民友社が *English Men of Letters* を模倣して十二文豪を出版した。どのように選ばれたかは不明だが、十二文豪の中には Emerson, Carlyle, Macaulay, 日本の荻生徂徠, 新井白石らが入っていて、ロマン派詩人からは Wordsworth, Byron, Shelley の3人が含まれている。この中でいち早く出たのが宮崎八百吉著『ワルズワルス』(明治26年 [1893]) である。これは Wordsworth に関する最初の単行本で Wordsworth の写真、年譜に続いて、本文は「詩人前記」「詩人正記」「詩人後記」の3部に分かれ、全体210頁の小冊子である。「詩人前記」は Wordsworth 家の系図から始まり、由緒ある家柄であることを強調し、幼年時代からケンブリッジ大学卒業後、フランスに渡り、帰国するところまでを記している。当時はアネット・バロンとの恋愛事件は公にされておらず、彼のオルレアンでの生活は簡単に触れられているに過ぎない。「詩人正記」は Wordsworth が天才詩人に成長する過程を追い、その間の妹ドロシーの貢献、Coleridge との交友を詳細に記し、月桂冠を得るところで終わっている。「詩人後記」では「ワルズワルス及び陶淵明」と名付けられた一章で、同じ田園詩人である陶淵明と比較している。宮崎は Wordsworth が自然物のもつ霊的生命を歌う詩風を受け入れて「彼が自然をみるもなお人をみるが如くその生命をみたり。彼は人と自然を以てひとしく神の表象」(pp.143-144) と見る自然観に感動している。宮崎は作品分析はせず、長編詩にもあまり触れていない。概ね、イギリスで出された F. W. H. Myers: *Wordsworth* (1878) を下敷きにしたことはよく指摘されることであるが、その模倣のみにとどまるのではなく、Mathew Arnold の「ワーズワス論」にも触れ、*Lyrical Ballads* なども読んだ形跡がみられ、Wordsworth の最初の研究書としての啓発の役割は大きい。

Wordsworth は他にも多くの文人に愛誦され、引用され、模倣された。その代表として国木田独歩 (1871-1908) が挙げられる。彼は『欺かざるの

記』の中で Wordsworth への熱中を述べ、その影響のもとに詩人、小説家となったと記している。² 彼は Wordsworth の歌った自然と人生を一体として受け入れる態度に共鳴し、特に “The still, sad music of humanity”³ の一句を愛誦したと言われる。作品の中で直接の影響を受けたのは “Michael” で、これをもとにして処女小説『源叔父』（明治30年 [1897]）を発表している。これは大分県を舞台にして、素朴で純情な老人の源おじが自分の死んだ子と同年齢の白痴の乞食の子を拾って育てるが、ある夜目覚めるとその子は逃げてしまっていた。老人はそれを悲しんで死ぬという話である。“Michael” に登場する農村の純朴な老羊飼が愛情こめて育てた息子の都会での墮落に悲しんで死んでいく話を思わせるものである。

島崎藤村（1872-1943）も Wordsworth の詩を味わい、その詩の基本概念を学び、日本の近代詩に大きな影響を及ぼした。『若菜集』（1897）の序はその代表である。Wordsworth が Preface to *Lyrical Ballads* で歌った新しい詩の時代は藤村が「遂に新しき詩歌の時は来りぬ」⁴ と宣言した精神と同じである。藤村が彼の幾冊かの詩集をまとめて、『藤村詩集』（明治37年 [1904]）を編さんした時の序に次のように記している。

うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉を飾れり。伝説はふたたびよみがへりぬ。自然はふたたび新しき色を帯びぬ。（p.11）

と言い、更に「詩歌は静かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや」（p.11）と歌っているが、これは Wordsworth の “Poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings; it takes its origin from emotion recollected in tranquility.” (Perkins, p.328) をそのまま写していると言える程である。藤村の言う「民俗の言葉」は Wordsworth の “the very language of men” (Perkins, p.321) であり、「伝説はふたたびよみがへりぬ」は当時のバラッドの流行と通ずるのである。

浦瀬白雨は Wordsworth の最初の訳詩集『ウォルツフォスの詩』（明治38

年 [1905]) を出して大きな貢献をした。これは数頁の小伝に続き21篇の詩が訳されている。“Immortality ode”を冒頭に配し、他は“Hart-Leap Well”や“Lucy Gray”“We are Seven”など当時親しまれた作品が納められている。浦瀬は「はしがき」で「出来得る限り原義を失はざらん事を勉めぬ」と述べ、時にそれが無理な場合は原義を失わぬ程度において人称、時などは原作とずれることもあると釈明している。その一例として“Lucy Gray”の訳で題名を「おつゆ」と日本名にして恐らくは当時一般的であったであろう女性名に置き換えて全体の雰囲気を変えようとしている。これには夏目漱石の序がついているが、漱石らしく皮肉っぽく「浦瀬君の譯詩十数篇多くは断篇に過ぎず。且其措辞構句湖畔詩人の面目を写して遺憾なしと云ふ可らず」と述べている。それでもまだ読んでいない人は読んだら良かろうと意地悪い言葉で締めくくっている。

他に小原無絃『西吟新訳』（明治38年 [1905]）に13篇の Wordsworth 詩の訳が含まれ、秀れた訳である。西村酔夢『西詩の薫』（明治39年 [1906]）にも3篇含まれている。こうして Wordsworth はかなり広く愛読され、影響を与え、その熱烈な傾倒は明治末期まで続いた。

これに反して Coleridge の紹介は遅れている。最初に Coleridge を扱ったものは森しつか訳「哲学者としてのコルリッジ」（明治26年 [1893]）で、⁵ 他には大和田建樹篇『欧米名歌詩集』の中に Coleridge の詩が初めて3篇訳されている。「家を離れて」（“Something childish, but very natural”）、「恋」（“Love”）、「敗蘭」（“Christabel,” Part 2, ll.408-420）である。明治30年代までに時折訳されたのが“The Rime of the Ancient Mariner”の中の一部で、易しい部分のみが選ばれ、作品全体の内容を伝えるようなものではない。西村酔夢篇『西詩の薫』にも Coleridge が扱われ、「モンブランの暁の讃歌」「老水夫」「恋」の3篇が訳され、特に「老水夫」は第1節全部が訳され、語学的な注釈、韻律も注意が払われ、明治期の重要な文献になっている。⁶ 彼はむしろ Wordsworth の友人として注目され、宮崎の『ヲルツヲルス』の中の一章で「革新詩人ヲルツヲルス及び舊派詩人コレリッジ」

と幾分奇妙だが対照的に扱われている。Coleridge はなぜか文壇で模倣されたり、他のロマン派詩人のようにその詩句が口ずさまれることはなかった。

Byron は早くから受容されて、まず森鷗外の「於面影」(明治22年 [1889])に収められる『マンフレッド』の冒頭と「いねよかし」(*Childe Harold* 1.13)の訳で知られる。鷗外はドイツ語の方が堪能だったので、Heine のドイツ語訳から重訳されたものである。『マンフレッド』の第1節は後に引用するが、主人公の深い絶望感と孤独感は近代日本の青年に訴えるものが大きかった。同じ頃熱心な愛好者北村透谷によって “The Prisoner of Chillon” の翻案ともいえるべき『楚囚之詩』(明治22年 [1889])が出された。透谷は彼の身边に起こった事件で、政治の罪人として捕らわれた男たちが明治22年の憲法発布の際に大赦によって釈放されて自由の身となった事件を題材にしている。Byron も政治犯が Chillon 城に幽閉された話を題材にしたものであるが、違うのは、透谷の詩では自由を得て花嫁まで迎えるのに、Byron では釈放の後も心の安らぎはなく、永遠の苦悩が課せられて暗い。透谷は自由への憧憬と権威に抵抗する不屈の情熱を Byron から取り入れたのである。これは新しい時代を迎えた明治半ばの気風とよく一致して人々に受け入れられた。透谷は2年後には同じく Byron の詩劇 “Manfred” (1817) をモデルに『蓬萊曲』(明治24年 [1891])を出している。この詩劇の主人公はマンフレッドそのものであり、人生観や不屈の抵抗精神、厭生観、宗教による救済の拒否などを共有している。日本の英学史上、この2篇の翻案詩は未熟だが日本文学にも表れた初めての Byron の影響で、傑作とは言えないが永遠の生命をもつ。⁷

明治30年代に入ると、民友社から米田実の評伝『バイロン』が出された(明治33年 [1900])。この本を参照する機会がなかったが、日夏耿之助の「本邦に於けるバイロン熱」では「単純な記事の外、特に強い主観のない小著にすぎず」⁸と手厳しい。

明治期のもう一人の Byron の信奉者は評論家、翻訳家の木村鷹太郎 (1870-1931) である。その代表的な著作は『バイロン文界之大魔王』(明治35年

[1902])である。これは木村自らが凡例の中で述べているように、Thomas Moore: *The Life of Lord Byron with His Letters and Journals* (1830) に拠っている。第1編は「英国に於ける詩人バイロン」で、幼少時代、ケンブリッジ時代、結婚、離婚から英国に訣別するまでを述べている。第2編は「外国に於けるバイロン」、第3編は「バイロンの思想・文学・哲学」、第4編は「英雄バイロン」でギリシャの独立戦争とそこでの死を論じている。木村の論旨はかならずしも標準的ではなく、彼独特の独断的な意見である。日夏耿之助は『明治大正詩史』(巻上)において、次のように批判している。

『バイロン文界之大魔王』を出して、ムア伝に基き詩人の一生を辿ったが、間々、銜気にみちた、思ひ上がった小感想を挿んで批評と更へてゐる。これも既に余り非時代的な陳腐な論体で何ら値あるものでなかったが、只彼の余りに幼稚な一図な同情が、かへって一種の色彩となって一部稚い読者を牽引した。畢竟、この種の、鑑賞のセンスなくして、独断的に思想上の会得を獲たりと盲信する風の詩の愛好家は明治末代迄引つづいて存在したので、その最初の人物がこの木村鳴湖に外ならぬ。(p. 398)

随分手厳しい批評であるが、出版当時多くの人の抱いた感想であった。木村は他に *Parisina* の訳を『艶美の悲劇詩パリシナ』(明治36年 [1903])、*Corsair* の訳『海賊』(明治38年 [1905])、*Mazeppa* の訳を『汗血千里マゼッパ』(明治40年 [1907])、*Cain* の訳『宇宙人生の神秘劇 天魔の怨』(明治40年 [1907])を出しているが、いずれも訳としてはあまり秀れたものではなかったようだ。

やはりこの頃 Byron を天才と崇拝し、訳詩者として功績をなした詩人に児玉花外 (1874-1943) がいる。彼は「日本のバイロン」⁹と自称し、木村に劣らぬ心酔ぶりであるが、この2人は対照的に受け取られ、木村が右翼バイロニズム、児玉が左翼バイロニズムと言われている。¹⁰ 彼は『バイロン詩集』

(明治40年 [1907]) を出しているが、その序において「バイロンは熱烈太陽の如き天才なり、またアルプスの大雪なり、地中海の波涛なり、彼の美貌花の如く、女子を迷はすの悪魔」と大げさな賛辞を贈っている。巻頭にバイロンの生涯を記し、Byron の短詩40篇を散文体に訳している。児玉は Byron の生涯を「悲哀史」(p.11) と見、幼い時より父に捨てられ、不具であり、家庭の幸せを知らず、客死した不幸を述べている。その訳詩の選択はどのような基準か明らかではないが、多くは女性を読んだもの、恋を題材にしたものを選んでいいる。これは大正4年まで版を重ね、大正デモクラシーに乗じて人気を博したようだ。日夏耿之助は「拙劣なる訳詩にすぎぬ」(「本邦に於けるバイロン熱」(p.6)) と批判的である。

Shelley も明治20年代までは文人たちに断片的に言及されるのみで、雑誌などには時折“To a Skylark”や“The Cloud”などの一部が引用されたり訳されたりしたのに留まる。Byron 程に全面的に模倣される作品はなかったが、明治30年代に入って日本の近代化に拍車がかかると、Byron, Shelley と並び称されて思想界に大きな影響を及ぼしはじめ、大正デモクラシーを頂点として、この二詩人の人気は上昇した。この気運の中で研究書も比較的早く出され、本邦最初の Shelley に関する単行本が民友社から出た濱田佳澄著『シェリー』(明治33年 [1900]) である。これは著者の早稲田大学の卒業論文である。全体166頁で、内容はI. 時勢、II. 30年間の短生涯、III. 詩人としてのシェレー、IV. 社会とシェレー、V. シェレーの人物、から成り立っている。包括的な著作であるが、荻田庄五郎によれば J.A.Symonds 著 *Shelley* の要約とも言うべきもので、¹¹ 特に第2章30年間の短生涯は Symonds の意見そのままである。濱田の独創性は少ないが、Shelley への愛と尊敬から生み出されたことは明らかであり、日本に Shelley を広めた功績は大きい。また小原無絃は日本における最初の訳詩集『シェレーの詩』(明治38年 [1905]) を出して、この頃から大正期にかけての Shelley への憧憬のきっかけとなった。

Shelley は急速に人々をひきつけたが、Byron 程文壇でもてはやされた

り翻案が出たりはしなかったが、かなり広く文学作品に引用されたり、人々に口ずさまれたりした。もっとも顕著なものは夏目漱石の「草枕」(明治39年 [1906]) に引用される “To a Skylark” である。主人公が山道を登りながら、この世の住みにくさを思うとき、谷間に雲雀の鳴き声を聞いて、この詩を思い、そのまま引用している。

We look before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.
(ll.87-90)

漱石はこれに和訳をつけて更に続ける。

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひ切って、一心不乱に、前後を忘却して、わが喜びを歌ふ譯には行くまい。¹²

この言及に対して海老池俊治は『明治文学と英文学』の中で、「この引用と訳はまことに美しく、作品の基調によく調和しているが、かなり勝手なシェリーの利用である」(p.172) と述べている。Shelley が地上の現実を超越した完全性を象徴する雲雀を讃えているのに、漱石は詩人がいかに幸せであろうとも、雲雀程に純粋な喜びに浸ることはできないという意味に用いているのである。同じ頃、夏目漱石は『文学論』(明治36年 [1903]) においても *Prometheus Unbound* や “Rosalind and Helen” などから引用している。また Shelley の散文も比較的早くから注目され、坪内逍遙は *A Defence of Poetry* の第7章を『文学折々』(明治23年 [1890]) の中で訳出している。文壇で広く受容されたのみならず、一般的にもこの頃の若者は “If Winter

comes, can Spring be far behind?”の一句を街で口ずさんだと言われる。

Keats の導入も Wordsworth や Byron に比べると遅れた。¹³『西国立志編』に名が載ってから英文学史や山田美妙の『万国人名辞書』などに断片的な記述がある程度である。その記述においても明治30年ごろまで Keats の評価はあまり高くはなかった。そのうち、他のロマン派詩人と同じく Keats も詩人、小説家に翻訳され始めた。まとまった最初の文献は平田禿木の「薄命記」(『文学界』明治27年 [1894]) である。これは6ページ程のもので、平田は Fanny Brawne 宛ての3通の恋文を訳し、Keats の不幸な恋と早死を嘆き、哀れな詩人という感傷的な見方によって、人々に印象づけようとした。他に蒲原有明が“Bright Star”(明治36年 [1903])を訳しているが、難解な語句を用いてはいるが、美しい訳として当時の人々に喜ばれた。Keats に関する最初の単行本は田山花袋の『キーツの詩』(明治38年 [1905])である。23篇の訳詩が含まれているが、誤訳が多いことは出版当時から指摘されている。¹⁴西村酔夢編『西詩の薫』には Keats の“On the Grasshopper and Cricket”と“The Eve of St. Agnes”の最初の2連が含まれているが、自然を題材としたもので親しみやすかったのであろう。後には Keats を熱心に自らの文学に取り入れる小説家や詩人も現れるが、明治期にはまだごく一部の文人にしか読まれなかった。

明治期の文学作品に与えた Keats の影響については松浦暢著“John Keats and His Influence on Modern Japanese Poetry”に詳しいのでここでは簡単にするが、Keats への言及で初期のものは上田敏の『従軍日記』(明治26年 [1893])における *Endymion* のことを述べたものである。同じ頃、島崎藤村が『若菜集』に含めた「明星」は Keats の“Bright Star”にヒントを得たものである。最も大きな影響を受けたのは薄田泣菫である。Keats の詠んだ“A thing of beauty is a joy for ever”の一句を愛誦して自らの詩の中に「美しきものは常久に」と歌い込んだほどである。泣菫は彼の詩想の深まりと共に Keats の感化も一層深いものとなり、詩形においては『暮笛集』(明治32年 [1899])でソネットを真似て絶句という八六調の

14行詩をつくっている。その後数年を経て、やはり詩人であった蒲原有明訳「みやうじょう」が彼の詩集『独絃哀歌』（明治36年〔1903〕）の中に含まれている。研究面ではまだ目ぼしいものはなく、一般の読者もごく少なかった。

明治26-27年ごろに Wordsworth 熱は頂点に達したと言われ（『欧米作家と日本近代文学』p.96）、明治末期から大正時代に入る頃、大正デモクラシーが文化、文学一般にも浸透するようになった。これは天皇の権力機関の支配に反対して、明治憲法のルールに従って支配を行わせようとした運動であった。だが、この運動も真に権力の主体が人民にあるのではなく、単に人民のために現存政治権力を運用しようとするものであったが、第一次世界大戦による世界的なデモクラシーの影響もあって、思想的、文化的に個人の自由や権利の関心を呼び覚ました。¹⁵ この気運の中で、文壇では Byron や Shelley へ関心に移り、Wordsworth の翻訳としては木内打魚の訳した『ワーズワース詩集』（大正15年〔1926〕）があるのみで、これもあまり進展がなく、それまでによく取り上げられた抒情詩が中心である。研究書としては鷺山悌三郎著『自然詩人ワズワース』（大正15年〔1926〕）の一冊がある。はじめの4章が Wordsworth の詩の評論で、あと28篇の抒情詩の訳と『グラスミア日記』の訳がついているが、*The Prelude* や *The Excursion* などの長編は含まれていない。自然詩人としての Wordsworth 導入の初期と同じく、比較文学的視野に立ち、日本の自然観との比較対照をし受容している。

Coleridge に関しては出版物は少なく著書は一冊もない。上記の鷺山悌三郎の本の中に Coleridge に関する記述があり、他にも雑誌、選集、英詩概論といった種類の本の中に引用されたり、言及されたりしている。翻訳は“The Ancient Mariner,” “Love,” “Dejection”などが一般的な文学論に含まれているのみである。

大正期に最も人気を博したのは Byron と Shelley で、両詩人はならび称されて、明治末期から矢継ぎ早に翻訳や評論が出された。小原無絃がページの左右に英和対照をなした『シェレー詩集』（大正8年〔1919〕）という小冊子を出した。これは明治39年に出されたものとほぼ同じと思われるが、こ

ちらは30篇を選び、良く知られた抒情詩が中心である。巻頭に配された
“The Cloud” のはじめの部分をあげると、

I bring fresh showers	われは大海、 ^{さざれ} 細流より
For the thirsting flowers,	渴ける花にそそがんと、
From the seas and the streams;	すずしき雨を齎しつ、
I bear light shade	われはかすけき影を垂れ、
For the leaves when laid	真晝の夢によこたはる
In their noonday dreams.	木々の ^{みずは} 瑞葉をかばふかな。

幾分古い言葉を混じえて七五調の美しい言葉で原詩の趣を伝えている。「大海細流」や「木々の瑞葉」の言葉は音と共に雰囲気をも移し秀れた訳である。

“Ode to the West Wind” の最後の2行も「おお、風よ、冬去り来れば
などか春とておくれんや」と美しく情緒ある言葉にしている。

すぐ続いて出された正富汪洋訳『バイロン・シェリィ二詩人詩集』（大正10年 [1921]）は当時の世相を反映して二詩人を一度に扱っている。これは二人が無二の親友であったことに著者は深い感銘を受け、二詩人の作品の中から興味をひいたもので、比較的短いものを選んで編さんしたものである。短いものの方が親しめるからだと述べているが、Byron の詩からは“Parisina”や“The Prisoner of Chillon”のような長篇も含めて11篇、Shelley は短いもの34篇が含まれる。そして序において「バイロンが噴火山ならば、シェリィは野火である。バイロンが盛夏であるならば、シェリィは初秋である。バイロンが大瀑布ならば、シェリィは急流である。バイロンが雉子ならば、シェリィは雲雀である。バイロンが迅雷ならば、シェリィは秋風の響である」（pp.10-11）と2人を讃えている。またシェリィは詩に依って世を教化しようとし、デモクラシーの先駆をなした詩人と受け止めている。作品は概ね両詩人とも七五調を基本とした訳であるが、あまり読み易くはない。Shelley の“The Cloud”を小原無絃の訳と比べると、小原の言葉遣いの方が美し

く情緒的である。

研究書としては濱田佳澄の『シェレー』以来20年ぶりに内多精一著『シェリーの面影』（大正11年 [1922]）が Shelley 死後100年を記念して出された。内多は Dowden や William Sharp や J. A. Symonds らの評伝を参照しながら、この著書では普通の伝記の形をとらず、詩人としての Shelley を解説することに力を入れている。第1章から第6章まで、「若きシェリー」「革命詩人シェリー」「抒情詩人シェリー」「自然詩人シェリー」「最後のシェリー」「キーツとシェリー」から成り立っている。自然詩人としての Shelley には特に多くの頁を割き「抒情詩人及び自然詩人としてのシェリーは、社会改造論者及び人道主義者としてのシェリーから生まれ出たものである」（pp. 201-202）としている。彼の自然詩では“Mont Blanc”や“The Sensitive Plant”を詳しく取り上げている。彼のほとんどの作品は青空の下で書かれたもので（p.234）、その点からも自然詩人としての天才が絶頂に達した（p. 235）という。この本は当時の本としては珍しく、かなりていねいな索引をつけて読者の便を図っている。

同年『詩聖』という月刊誌が「シェリー記念号」となって出されている。当時の主な文人や研究者が Shelley の生涯やその社会思想、宗教思想などを論じている。冒頭を飾るのは詩人野口米次郎の「シェレー」と題するこの詩人に捧げた詩である。はじめの4行は

彼は生まれ乍らに完成して居る自然児、
歴史…多くは虚偽だ、社会……多くは妥協だ、彼はそれ等の継剥細工で
ない。

教育も彼の世界を教へることが出来ない、
経験も彼の世界を誠めることが出来ない。

かくの如く野口の抱くシェリー像を歌い上げているが、これは当時の人々の憧れたシェリーの姿を鮮やかに浮かび上がらせるものである。

この記念号には佐藤清「シェリィの戀愛詩に就て」や斎藤勇「シェリィの宗教思想」も掲載されているが、横山有策の「シェリィの劇『チェンチー族』」も注目すべき論文である。『詩の擁護』の中にも述べられているように、横山は Shelley の劇に対する態度を重視するのである。そして彼の完成した唯一の劇である『チェンチー族』に Shelley 特有の「想像の翼を限りなく広げて」、その上劇作家に必要な抑制の力を加えて成功し、「近代稀に見る引緊った悲劇」となっていると讃えている (p.41)。『シェリーの面影』にもこの劇が取り上げられているが、観点は概ね似ていて、両者とも Macbeth に負うところが多いこと、ベアトリスを理想の人物とみて Shelley 自らの姿を反映していることなどを指摘している。そして両者とも Shelley のこの劇の制作態度を賞め、それは「客観的態度」(p.103) と言い、ほぼ同じ意味を横山は「抑制」という言葉で表現しているが、これによって読者をひきつけていると述べる。日夏耿之助の「シェリ研究書目」は欧米で出版された Shelley 関係の伝記、批評、書簡などを広く網羅しており、当時既に Shelley の出版物が相当日本に知られていたことを示している。この『詩聖』の記念号は100頁余の小冊であるが、研究テーマも多様で、かなりのレベルに達している。

Shelley 没後100年を記念してもう一冊斎藤勇編著『英文学研究 (別冊第二) シェリ研究』が編さんされている。これは上述の『詩聖』と共に当時の関心の深さを反映し、中でも15人の詩人が Shelley に詩を献じているのは意味深いことである。『詩聖』にも執筆している横山有策著訳の『シェリーの詩論と詩の擁護』(大正12年 [1923]) や、牛山充訳『シェリー詩集』(大正12年 [1923])、松山敏訳『シェリの詩』(大正13年 [1924]) などが相次いで出された。いずれも大正時代の世相の中で Shelley が歓迎されたことを示すが、Byron と異なり、彼の作品を模倣したり、「バイロン熱」のようなものが世の中に流行することはなかった。やはり詩人の持ち味であろう。

大正末期1926年に土居光知の注目すべき論文が出された。「シェリの詩に於ける色の象徴」¹⁶である。これはそれまでになかった学問的考察に裏づけ

られた感受性豊かなアプローチで、以後の Shelley 研究に大きな影響を及ぼした。土居は *Queen Mab* から *The Triumph of Life* に至るまで、red, blue, dark, white の語を用いる度に終始一貫して同様な情緒を伴わしめていることに着眼し (p.39), red は火災や血の色を連想せしめ, blue は冷たさ, 憂鬱, 死などを思わせるとして, 多くの例を上げている。当時としては新鮮な研究であった。

この頃の Keats の本の中でまず注目すべきものは、Keats 関係のほぼ最初の評論と言われる佐藤清著『キーツの芸術』(大正13年 [1924])である。この本は *Endymion*, “Isabella,” “The Eve of St. Agnes,” “Lamia” など、これまであまり論じられなかった物語詩を網羅し、オード群, 2つの “Hyperion” や “The Eve of St. Mark” に至るまで扱っている。その上「ミルトンとキーツ」や「ワーズワスとキーツ」などの比較した論文も書いている。引用された詩はすべて佐藤が訳しているが、口語体で分かりやすい。Hancock や Bridges や Selincourt を参照しその意見を取り入れながら、多くは佐藤の意見による作品の解説をしている。学者詩人だけあって、詩の美しさには敏感で、“The Eve of St. Agnes” に関して「最も著しい技巧は、鮮やかなコントラストを連続して、詩的效果を高め、魔力と驚異との夢のやうな雰囲気をも以て、全体を包んでゐる点である。殊に変移する月光の取り扱い方に於て、此のコントラストの感じが最も精妙な発達を遂げてゐる」(p.63) とその感動を表現している。最後の章「恋と死」では “Bright Star” を原文のまま引用して、「これを恋と死のふたつの矛盾せる憧れを一つにしたもの」(p.234) という見方をし、Keats が求めたものは美以外の何ものでもなく、ここに彼の悲劇的性格がある (p.236) と結び、Keats を感覚美の詩人と受け止めている。大正14年 [1925] に渡辺正知訳『キーツの詩』に17篇が収められているが、きわめて読みにくい。Keats の日本への導入から40年経ても論文は少ない。文壇では明治期と同様 Keats に傾倒する詩人もいて、その一人八木重吉 (1898-1927) は「キーツに寄す」と題して「うつくしい 秋のゆうぐれ 恋人の 白い 横顔—キーツの 幻」¹⁷ とその憧

れを歌っている。

昭和に入って英文学研究も本格的になる。日本の大学の数も大正9年(1920)に16大学であったのが、昭和10年(1935)には45大学となり飛躍的に増加した。¹⁸ 研究社は昭和8年(1933)に英国の *English Men of Letters* を真似て『英米文学評伝叢書』(103巻)の刊行を開始し(『日本の英学100年、昭和篇』p.15)、執筆者は日本の英米文学者を網羅し、学生たちに英文学への道を開いた。勿論ロマン派の5詩人も含まれている。いずれも150頁程度の小冊子であるが詩人の伝記、主要作品の解説、書誌からなっている。佐藤清著 *Wordsworth* (1934) は Harper 及び Legouis の評伝に負うところが多く、Annette Vallon との恋愛事件をかなり詳しく説明し、Wordsworth が彼女と正式の結婚をしなかったのは Godwin の *Political Justice* の影響だと考えている。桂田利吉著 *Coleridge* (1934) は James Gillman: *Life of Coleridge* (London 1838) に依拠しており、かなり多くの詩行を引用して検討し、特に“The Rime of the Ancient Mariner” “Christabel” を重視し、Coleridge は最後まで美の幻を追う詩人だと結んでいる。阿部知二著 *Byron* (1937) は Byron に関する最初の研究書である。早くからもてはやされたにもかかわらず、研究面ではこの時期に至ってようやく陽の目を見たのである。阿部は「はしがき」において、それまで Byron の生涯に興味を引かれるあまり、作品が見逃されていたのをいましめ、作品と生涯は切り離せないと述べている。各作品の議論はあまり深くないが、阿部の意図したとおり、伝記の中に制作された詩を深く織り込んで論を進めている。矢野禾積著 *Shelley* (1937) は *Alastor* から *The Triumph of Life* までの主要な長篇を中心に扱っている。彼は学者の研究は Shelley の価値を高めているのに反し、ジャーナリストや青年は T.S.Eliot の酷評の影響のためか実質以下に評価していると述べ、矢野は Shelley をイギリス詩人中の最高峰に置くとしている(はしがき)。特定のテーマを論じたものではないが、作品の解説は妥当であり、よい入門書となっている。斎藤勇著 *Keats* (1936) では Keats を感傷的な評価をせず、史実を中心に人間 Keats を描き出し、作品

を一貫している精神を解明するという初志を貫いている。そのため初期の作品では“Sleep and Poetry”に比較的多くの頁を割き、円熟期に達成される人道主義者 Keats の萌芽をみる。また1934年に出たばかりの *John Keats's Anatomical and Physiological Note Book* を参照し、Keats は医師としても有能であったことを説いて、当時の日本の研究者ではあまり重視されなかった側面にも焦点を当てている。また2つの“Hyperion”なども評価し、基本的には *Keats's View of Poetry* と同じ観点を呈している。この叢書の著者はいずれも日本のロマン派研究の秀れた先駆者で、戦後まで多くの著書を出して貢献した。

この評伝叢書の他にも昭和期になって何冊かの研究書が出た。Wordsworth に関しては何冊かの訳詩集が出され、次第に一般化した文庫本にも入っていて、読者層が広がったことを示す。雑誌や各大学の紀要も増えて論文数も多いが、多くは自然詩人としての Wordsworth を捉えたもので、国木田独歩の受容を論じたもの、芭蕉と比較したものなども散見される。また Herbert Read の *Wordsworth* (1930) や C.H. Herford: *The Age of Wordsworth* (1897) など論じられている。Wordsworth と Milton, Wordsworth と Keats といったテーマも見られ、研究範囲は広がっている。単行本では小川二郎著『ワーズワス研究』(昭和15年 [1940]) がある。小川は日本人読者にとって困難な研究テーマである韻律に敢えて一章を設けて論を展開している。翻訳では幡谷正雄訳『ワッツワス詩集』(昭和2年 [1927]) 及び田部重治訳『ワーズワース詩集』(昭和13年 [1938]) が出ている。

Coleridge に関する初めての単行本として工藤好美著『コウルリヂ研究』(昭和6年 [1931]) が出版された。それまで Coleridge 研究では大部分が詩作よりは哲学者、批評家としての Coleridge に目が向けられていたが、工藤も「序」においてもともと批評家としての Coleridge を取り扱うつもりであったが、詩の魅力にとりつかれ、詩の方を多く論じたと述べている。詩的生涯を3期に分けて、1796年以前を修業時代、1797～1798年9月を黄金時代、そして1798年10月から死までをわびしく、長い追憶の時代としている。

修業時代は18世紀の詩の模倣であるが、Wordsworth 兄妹との交流が始まり、新しいロマンティズムの基礎が出来て、“This Lime-Tree Bower My Prison”を工藤はこの曙の時期の記念と見ている (p.14)。黄金時代は突然訪れてあわただしく去り、この短い命を工藤は「夏のみちかな夜の夢のやうな、それも全く健全でない、夢遊病者或は阿片吸飲者のやうな性質が、彼のこの時期の詩の特徴である」(p.17)と記述している。この天才の絶頂をみて3年と経たぬうちに詩人 Coleridge の終焉をみているのである。結論として工藤は「彼は最初から哲学者であり、同時に彼の哲学はその中に自然と人間と神とを織りこんだ一つの巨大な詩であった」(pp.82-83)と述べている。工藤は Coleridge の哲学者、詩人の両方を総合的に理解して、それまでになかった優れた学問的業績にしている。全部で150頁余であるが、その中で1/3が研究書目に当てられているが、工藤が直接 Bodleian Library で収集したものであり、実際の役に立つように配慮して詳しいコメントが付けられ、しかも1930年ごろまでの最新の出版物を網羅している。彼は昭和8年(1933)に『コオルリッチの文学論』を出しているが、基本的には同じ Coleridge 観である。他に岡本昌夫、加藤龍太郎、桂田利吉らの著名な研究者が Coleridge の文学論や想像説についての論文を発表したが、中でも岡本訳『コウルリッチ談話集』(昭和18年[1943])は貴重なものであり、斎藤勇・大和資雄訳『コウルリチ詩集』(昭和15年[1940])は本邦最初の詩集である。

Byron に関しては明治大正時代程の燃え上がった情熱はないが、他のどのロマン派詩人よりも早く、昭和11年(1936)に『バイロン全集』全5巻が出された。これは訳者は様々であるが代表作をほとんど全訳し(『ドン・ジュアン』は抄訳)、書簡集も含まれている。日夏耿之助による「バイロン研究」という論文が3, 4, 5巻に収められている。訳のうち第1巻冒頭に配されている「マンフレッド」の第1幕1場を「於面影」に入れられた訳と比較してみよう。原文は韻文であるが、岡本成蹊は散文訳にして次のように書いている。

灯火に更に油を注がねばならぬ。だが、それにしても、俺が見張ってゐる間ぢうはもつまい。俺の睡眠は—仮令睡ろむにしても—それは眠りではない。何時までも続く思想の連続だ。されば、俺にはどうすることも出来ない。俺の心の中には、不寝番がある。その両眼を閉ぢるのは心の内部を見るために過ぎない。

森鷗外訳は

ともし火に油をばいまひとたびそへてむ
されど我いぬるまでたもたむとも思はず
我ねむるとはいへどまことのねむりならず
深き思のためには絶へずくるしめられて
むねは時計の如くひまなくうちさわぎつ
わがふさぎし眼はうちにむかひてあけり

両訳を比較すると、岡本は原文に忠実にしようとしているが、平板で説明的すぎ、逐語訳によって味わいを失っている。森鷗外の方が幾分原文からずれるところがあっても詩的情緒に富む。全体に『バイロン全集』の訳は用語は古く、誤りも多く、あまり秀れているとは言えないが、この時期にこれだけの人数の研究者を揃え、全集が刊行されているのは Byron だけであって、いかに広く愛読されたかを示すものである。この全集は1995年に復刻されている。昭和13年（1938）には抒情詩を中心にした阿部知二訳『バイロン詩集』が出され、格段の進歩を示している。

Shelley に関する戦前の研究で代表的なものは荻田庄五郎著『シェリイ研究』（昭和18年〔1943〕）である。これは伝記というよりは詩人の様々な側面を検討して Shelley を理解しようとするものである。なかでも「シェリイと人生」の章では当時の肖像から人々は「名門の出に相應しい優雅な気品、

永遠に失はれない青春、現世の汚濁から脱して常に理想を追求し、美の頌歌を誦した、あの美しいが、役に立たぬ天使」(p.45) という受け止め方をしていたが、これを批判し、苦難に満ちた人生を歩んだ Shelley に焦点を当てようとする。そのため Shelley の疾病、それに伴う精神的な苦悩、愛児の死、父との軋轢、最初の妻の死など暗い面を論じていく。そして Shelley は現実に確固たる根を下ろした詩人であり、人間の達し得る最も高き精神の世界に達した詩人であること (p.67) を描き出そうとしている。他に「シェリィと基督教」「シェリィと自然」などの章を設け、最後に「シェリィ雑録」と題して彼の帽子や衣服まで論じて、身近かな愛する詩人として浮かび上がらせている。翻訳では阿部知二訳『シェリィ詩と恋愛』(昭和11年 [1936]) に散文と手紙が含まれ、入江直祐訳『シェレ詩集』(昭和16年 [1941]) も出されている。

Keats の研究書は昭和に入って間もなく出版された斎藤勇著 *Keats' View of Poetry* (昭和4年 [1929]) が特筆すべきものである。これは著者の博士論文でこの時代としては珍しく英文で書かれた本である。彼はそれまでの感傷的な Keats 観を脱し、現実に根ざした人間主義的な詩人であるという観点を打ち立て、以後の Keats 研究に大きな貢献をしている。もうひとりの戦前の主要な Keats 研究者は日夏耿之助である。彼は Byron や Shelley にも造詣の深い学者詩人であるが、30年の詩人としての経験を生かし、『美の司祭—ジョン・キーツがオウドの創作心理過程の研究』(昭和14年 [1939]) を出した。日夏耿之助はオードこそ Keats の美の原理が凝縮していると考え、900頁に及ぶこの本の中ですべてのオードの韻、スタンザ、イメージ、思想などを取り上げて論じている。その上、彼は盲目的に西欧の研究者の意見に従うべきではなく、日本人は日本人の観点から Keats の詩を鑑賞すべきだと主張し、彼も多くの日本や中国の詩に言及して、この意見を実践している。大正・昭和前半に出された訳詩集は少なく、Keats に関する研究書は数は多くないが、出されたものはレベルが高い。多くの論文が出揃うにはもう少し時間が必要であった。

こうして Wordsworth, Coleridge, Byron, Shelley, Keats とともにようやく研究が本格的になってきたところで第二次世界大戦に突入した。ロマン派詩人が日本に紹介されてから最も多く読まれ研究されたのは Wordsworth であるが、初期は短い親しみやすいものから読まれた。何よりも Wordsworth は自然詩人として愛され、彼の歌った自然美は日本の詩歌に歌われる自然を想起させ、対照させて受け入れられたのである。長編詩は部分的に言及されるに留まり、哲学的思想はずっと後になってから研究された。また Wordsworth が *Lyrical Ballads* の序で宣言した新しい詩の時代の到来は、ちょうど日本の近代文学の黎明にも通じ、藤村らによって受け継がれたのである。Wordsworth の次に親しまれたのは Byron であるが、彼はむしろ日本にはない異国情緒や物語的な魅力やその奔放な伝記的事実などのために憧れをもって受け入れられ、熱烈な読者を得たのである。彼の作品は翻案もロマン派詩人の中では最も多い。「バイロン熱」の余韻なのか、昭和の初期に早くも全集が出版されているほどである。大正デモクラシーの世相の中で Shelley も共鳴者が多く、Byron とともに並び称されて、その自由思想、権力への反逆などが親しみをもって迎えられた。Shelley は大正期を通じて文献も多く、『詩聖』や『英文学研究』に特集が組まれたのも人気の現れと言える。しかしながら、Shelley の詩句が口ずさまれ、小説の中に引用されることがあっても、作品の模倣というのはなかった。Keats も遅れて日本に導入されたが、一旦紹介されると、藤村、有明、花袋、重吉ら多くの文人に愛読され、引用され、模倣された。当初は文壇を中心に受容されたが、次第に一般読者や研究者にも広まった。翻訳も詩人、小説家らに手がけられたため、文学的愛着は深くても、語学力が十分でなく、誤訳も多かった。全般に不幸な天才という感傷的な Keats 観が主流で、深く人間 Keats を理解するのはずっと後になってからである。最も親しまれないのが Coleridge である。他の詩人のような易しい詩が見当たらないのも人気がなかった理由であろう。まず Wordsworth の友人として登場し、次第に批評家、哲学者、詩人として研究されるようになり、最初の詩集、研究書とも、昭和になってから出版

されている。現在でも出版物は少なく、他の詩人のように熱烈な信奉者はなく、翻案もない。どの時期についてもどの詩人についても欧米の研究書は早くから日本に移入され、強く影響している。

ちなみに現在（1999）では Wordsworth は主な抒情詩、*The Prelude* 全編、*The Excursion* 全編が訳され、Keats は全訳詩集がある。Byron もほぼ全訳され、Shelley も短詩はもちろん主な長篇もほぼ全部が訳出されている。書誌が独立した本として出ているのは、Wordsworth、Coleridge、Shelley である。ロマン派関係の研究者の数では Wordsworth と Keats の専門家が格段に多く、初期の人気とは対照的に Byron は少ない。現在のこういう情勢は大戦前の文献の数や人気の高さとは少し違ってきている。

注

1. 「日本における Wordsworth」, 『英語青年』第96巻3号（昭和25年 [1950] 3月）, pp.102-105.
2. 「欺かざるの記」『国木田独歩全集』（学習研究社, 昭和39年 [1964]）第6巻, p.303.
3. “Tintern Abbey” (l.91) in David Perkins, ed. *English Romantic Writers* (Harcourt, Brace & World, 1967).
4. 『藤村詩集』（新潮社, 昭和43年 [1968]）.
5. 『英文学雑誌』其1,2,3,12月.
6. 福田光治他編『欧米作家と日本近代文学1』（教育出版センター, 昭和49年 [1974]）, p.119.
7. 『日本の英学100年, 明治編』（研究社, 昭和44年 [1969]）, p.197.
8. 『英語と英文学』（昭和4年 [1929] 7月）, p.6.
9. 佐渡谷重信「近代日本とバイロン」, 『英語青年』1988年4月号, p.7.
10. 剣持武彦「バイロンと近代日本の文学」『バイロン全集』第5巻, 復刻版（日本図書センター, 平成7年 [1995]）, p.9.
11. 『シェリィ研究』（研究社, 昭和17年 [1942]）, p.15.
12. 『漱石全集』第2巻（岩波書店, 昭和50年 [1975]）, p.391.
13. キーツに関しては拙著 “Japanese Scholarship on Keats” in *Keats-Shelley Journal* vol.39 (1990) に詳しく論じたので、ここでは簡単にする。

14. 茅野肅々「キイツの詩」(『明星』明治38年 [1905]).
15. 『世界大百科辞典』(平凡社, 昭和42年 [1967]).
16. 『土居光知著作集』(全5巻) 第1巻(岩波書店, 昭和52年 [1977]).
17. 鈴木亨編『八木重吉詩集』(白鳳社, 平成9年 [1997]).
18. 『日本の英学100年, 昭和編』(研究社, 昭和44年 [1969]), p.62.

書 誌

- 阿部知二『Byron』研究社, 1937.
- 内多精一『シェリーの面影』下出書店, 1922.
- 浦瀬白雨(訳)『ウォルツフォスの詩』隆文館, 1905.
- 大和田建樹(編)『欧米名歌詩集』全3巻, 博文館, 1894.
- Okada, Akiko "Japanese Scholarship on Keats" in *Keats-Shelley Journal*
vol.39 (1990).
- 岡本成蹊他訳『バイロン全集』全5巻(1936). 復刻版, 日本図書センター, 1995.
- 荻田庄五郎『シェリィ研究』研究社, 1942.
- 桂田利吉『Coleridge』研究社, 1934.
- 〃 『日本におけるコウルリッジ研究文献総覧』土木工学社, 1986.
- 茅野肅々「キイツの詩」(『明星』1905).
- 木村鷹太郎『バイロン文界之大魔王』大学館, 1902.
- 〃 『艶美の悲劇詩パリシナ』松栄堂, 1903.
- 工藤好美『コウルリヂ研究』岩波書店, 1931.
- 国木田独歩「源叔父」『国木田独歩・徳富蘆花集』新潮社, 1964.
- 〃 「欺かざるの記」『国木田独歩全集』学習研究社, 1964.
- 児玉花外(訳)『バイロン詩集』大学館, 1915.
- 小原無絃『英和對照シェレー詩集』朝野書店, 1919.
- 斎藤勇 *Keats' View of Poetry*. London: Cobden-Sanderson, 1929.
- 〃 『Keats』研究社, 1936.
- 佐渡谷重信「近代日本とバイロン」『英語青年』1988年4月号
- 佐藤清『Wordsworth』研究社, 1934.
- 〃 『キーツの芸術』研究社, 1924.
- 『詩聖』シェリィ記念号, 1922.
- 土居光知『土居光知著作集』全5巻, 岩波書店, 1977.
- 中村直太郎(訳)『西国立志編』駿河国静岡藩, 1871.

夏目漱石「草枕」『漱石全集』第2巻，岩波書店，1975.

『日本の英学100年』明治編，大正編，昭和編，1969.

濱田佳澄『シェレー』民友社，1900.

原田俊孝（編）『日本におけるワーズワス文献』桐原書店，1990.

原田博（編）『日本におけるシェリー研究文献目録』仙台イギリス・ロマン派研究会，1993.

日夏耿之助「本邦におけるバイロン熱」『英語と英文学』1929年7月号.

〃 『美の司祭—ジョン・キイツがオウドの創作心理過程の研究』三省堂，
1939.

〃 『明治大正詩人』上下，新潮社，1929.

福田光治他編『欧米作家と日本近代文学1』教育出版センター，1974.

宮崎八百吉『ラルツァルス』民友社，1893.

正富汪洋（訳）『バイロン・シェリー二詩人集』目黒分店，1921.

森しつか（訳）「哲学者としてのコルリッジ」『英文雑誌』其1，2，3，12月号，
1893.

松浦暢“John Keats and His Influence on Modern Japanese Poetry,”『キーツ—その夢と現実』吾妻書房，1979に収録.

八木重吉『八木重吉詩集』鈴木亨編，白鳳社，1997.

矢野禾積『Shelley』研究社，1937.

吉武好孝『近代文学の中の西欧』教育出版センター，1974.

米田実『バイロン』民友社，1900.

鷺山悌三郎『自然詩人ワズワース』新生堂，1926.

Perkins, David, ed. *English Romantic Writers*, Harcourt, Brace & World,
1967.

Reception of Romanticism in Japan before World War II

Akiko OKADA

Japan resumed its diplomatic relations with foreign countries in 1853 after over 200 years' isolation. Once Japan was open, various western cultures and literatures were introduced. English Romantic poetry was introduced to Japan about this period and has been widely loved by poets, novelists, and general readers. In this paper I survey how five major Romantic poets—Wordsworth, Coleridge, Byron, Shelley, and Keats—were received in Japan before World War II.

The first mention of the Romantic poets in Japan was in the translation of Samuel Smiles' *Self-Help* (1859), which was published under the title of *Saigoku Risshihen* in 1871. As the general atmosphere in Japan was the eager desire for rising in the world, the description tends to emphasize the poets' advancement from low status to higher; for example, Byron became famous after struggling with his lame leg, and Keats became a genius in spite of low birth. Though the introduction was not necessarily accurate, the book served to draw the attention of Japanese poets and novelists to the Romantic poets.

Ten years after the introduction, easier poems were translated and included in the collections of European poems such as Tateki Owada's *Obei Meika Shishu* (1894). Among the Romantic poets, Wordsworth was the most popular in the early stage; "Lucy Gray," "Michael," and "Immortality" were already translated in the 1890's. The reason

of his popularity was his emphasis on natural beauty, as Japan has a long tradition of nature poetry. Already in 1893, the first independent book on Wordsworth was published by Yaokichi Miyazaki; then in 1905, the first collection of Wordsworth's translated poems followed. On the other hand, Coleridge was late to be read; the first book on the poet was issued in 1931, almost forty years later than that on Wordsworth. The first selection of Coleridge's translated poems was published in 1940, again thirty-five years behind Wordsworth's.

Byron, in particular, was passionately loved and imitated from the early days. He was fascinating to the Japanese readers because of his narrative charm, exotic atmosphere, and his biographical facts. Ogai Mori translated the opening passage of "Manfred" and ten stanzas from *Childe Harold* in 1889. Tokoku Kitamura created a poem based on "The Prisoner of Chillon" and a drama based on "Manfred." These imitations were widely read, though not necessarily successful. From the end of the 19th century to the beginning of the 20th century, "Byronic fever" was prevalent. Shelley, combined with Byron, was also enthusiastically read as a revolutionary poet, eager for independence and freedom, as Japan had politically democratic atmosphere in those days. His works were not imitated like Byron's, but his lines were cited in novels.

Keats was late to become popular among a general audience. Though he was translated by poets and novelists and sometimes imitated in the 1890's, the number of such publications was small. Besides, people had for a long time been affected by the prejudice that he was an unhappy, love-sick poet. It is interesting to note that after World War II, Keats became most popular among the five Romantic poets, considering the late reception in the early days.

Thus, Wordsworth, Coleridge, Byron, Shelley, and Keats were well received and gradually became popular, each in a different way, during the seventy years after their first appearance in a Japanese book.